2019.11.08　中谷礼仁研究室
学部４年　藤本 秦平

大都市江戸東京における「縁（へり）」の固有性の解明
―谷中・湯島周辺を通して―

卒業論文最終発表

□ 目次

○序論
第１章　研究概要
1‐1　研究背景
1‐2　研究目的
1‐3　既往研究
1‐4　本研究の位置づけ
1‐5　研究方法
1‐6　論文構成

○本論
第２章　自然条件が初期都市開発に及ぼす影響と、それによる土地利用
2‐1　はじめに
2‐1‐1　本章の構成
2‐1‐2　本章の目的
2‐1‐3　用語定義
2‐2　武蔵野台地
2‐2‐1　概要
2‐2‐2　水系に関して
2‐2‐3　具体的な「縁」と呼ばれる場所
2‐3　上野台地
2‐3‐1　台地の自然条件
2‐3‐2　江戸初期の開発行為
2‐3‐3　土地利用の特徴
2‐4　本郷台地
2‐4‐1　台地の自然条件
2‐4‐2　江戸初期の開発行為
2‐4‐3　土地利用の特徴
2‐5　小結
第３章　江戸期以降の上野台地史と本郷台地史
3‐1　はじめに
3‐2　上野台地史
3‐3　本郷台地史
3‐4　小結
第４章　縁
4‐1　はじめに
4‐2　中規模性
4‐2‐1　周辺環境からの影響
4‐2‐2　土地造成
4‐3　後発的な整備
4‐3‐1　坂
4‐3‐2　道草空間
4‐4　二面性の保有
4‐4‐1　住宅と商店街利用者の変遷
4―4―2　坂と側道

○考察
第５章　考察
5‐1　「縁」の「型」
5‐1‐1　はじめに
5‐1‐2　寺町型―谷中
5‐1‐3　屋敷型―湯島
5‐1‐4　まとめ
5‐2　「縁」の可能性
5‐2‐1　はじめに
5‐2‐2　電波塔からみる東京
5‐2‐3　現代という時代背景と「縁」の可能性
5‐2‐4　まとめ

○結論
謝辞
参考文献
図版出典

第１章　研究概要

A. 研究背景

現在東京は近代化が進み、江戸期より続いている都市構造や生活の営みが大きく変容している。加えて東京は日本の首都として江戸時代（1603 年）より発展を遂げ、400 年が経過している。江戸時代に展開した東京の文化様式を継承している部分もあるが、現代ではジェネリックシティの様相も垣間見える。しかし、東京本来の環境を捨て地球の自立運動から乖離し、人間のための独立した生環境の構築をするのではなく、土地の固有性に対して再考し回復を図るべきであると考える。

B. 研究目的

本研究は、江戸東京において連続的な地勢条件を観察したうえで、特異な地形をもつ「縁 (へり)」に顕在化する固有性について考察する。以下におおまかな目的をまとめる。

① 江戸を基盤として現在成立している**東京に通底する要素**と**変化する様相**をみることで、都市の保持させるべきアイデンティティを認識すること

② 地勢条件や土地利用による、**「縁」の定義づけ**を行うこと

③ 上記の２つから導き出された江戸東京にある**「縁」について系統化**をすること

C. 既往研究

・**（全体研究）** 江戸東京全体の様相について、さまざまなスケールから観察し、大都市東京が元来もつ自然条件などにより成立した状況について述べている研究。
陣内秀信『東京の空間人類学』（1992，筑摩書房）

・**（地域研究）** 都市が形成されていく過程で、人々の営みが詳細な地域ごとによって特徴をもつことについて述べられている研究。
林順信『東京路上細見①―湯島・本郷・根津・千駄木・神田』（1987，平凡社）
酒井不二雄『東京路上細見③―上野・御徒町・谷中・入谷・根岸』（1988，平凡社）

・**（詳細研究）** 都市を坂や崖などの要素に分解し、より詳細な場所に対する固有性についての研究。
横関英一『江戸の坂 東京の坂』（1981，中公文庫）

D. 本研究の位置づけ

研究の手順を以下に示す。

① 背景となる江戸と東京の共通点、**地勢条件**（地形・地質・水系）についてまとめる。

② 江戸期初期の**開発行為**を確認する。

③ 現在に至るまでの**土地利用の変遷**を確かめる。

上記のように、人間が自然条件に対して及ぼした初期開発行為を確認し、それが土地利用に与えた影響を確認することで、「縁」の特性を捉える。

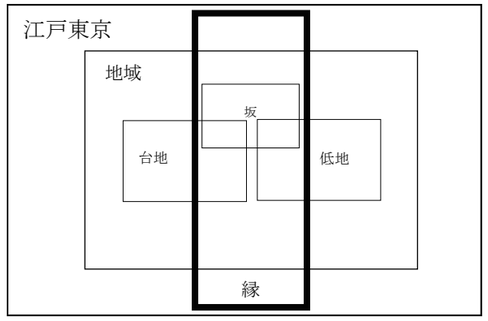

図１　本研究の対象地

E. 研究方法

本研究の方法は、江戸東京において共通する自然地形に対して行われた開発行為が、土地利用に与えた影響を観察することである。

地形 × 開発行為＝土地利用

本研究での地形・開発行為・土地利用に対する基本的な考え方は以下の通りである。

・地形：人間の開発行為や都市計画に比べ変化が長期的であり、江戸東京では微細な変化に留まっているもの

・開発行為：江戸時代初期の都市基盤を配したものや、災害・戦災によって生じた復興などのこと。（主な開発行為―下記年表にて図示）

・土地利用：時代とともに変化する土地の機能・状況・状態を表すもの。

江戸	明治	大正	昭和	平成
1603	1868	1912	1926	1989

○遷都（1603）
○明暦の大火（1657）
○戊辰戦争（1868 - 1869）
○文明開化
○関東大震災（1923）
○東京大空襲（1945）
○高度経済成長期（1954 - 1973）
○再開発

図２　開発行為が行われる可能性を持つ事象の基本年表

F. 論文構成

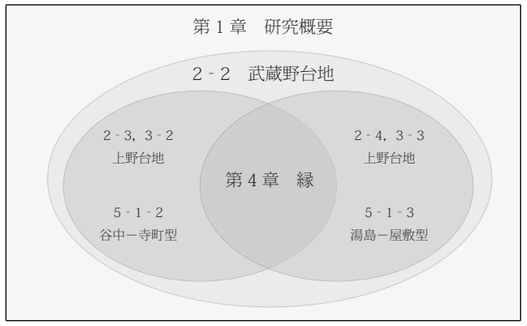

図３　論文構成

第２章　自然条件が初期開発行為に及ぼす影響と、それによる土地利用

A.「縁」の定義

・崖：人間が生活を営むことができない、**高低差が急変する場所**

・坂：人間が歩くことのできる**高低差のある道**

・縁：坂や傾斜面に建つ敷地を含む、台地と低地を緩やかに繋ぐ**人間の生活の場がある一帯**

B. 武蔵野台地

a. 地質・地形

まず、東京の「縁」において、特徴的な起伏に富み凹凸のある微地形が展開しているのは、**河川の浸食作用**によりできた河岸段丘によるものである。一方、台地と低地の狭間に崖が多く存在するのは、**海の浸食作用**によって形成された海岸段丘の影響を受けたものである。このように、江戸東京では、西側から東側にいくに従い、基盤となる地質が異なる。同時に、地形に対する変化の要因も河川なのか海なのかによって異なり、土地の様相を根本的に変容させていく重要な要素であった。

図４　本研究の対象地

b. 水系

陣内秀信・高村雅彦編の『水都学Ⅲ』（2015 法政大学出版局）を参考にして、**「地形地質に即した地下水系・流域としての表流水系・水源としての雨水系・気候を左右する海水系」**という江戸東京の循環する水系に関してまとめた。特に江戸時代は河川による流通が盛んだったため、表流水系の周辺には賑わいの場が展開していた。

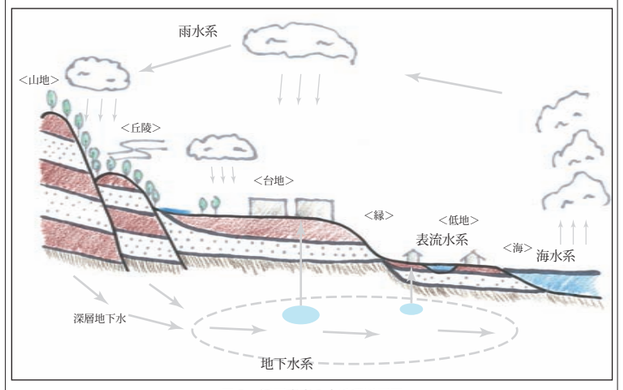

図５　江戸東京の水循環断面図

C. 上野台地

a. 台地の自然条件

上野台地を全体的にみると、**崖線を形成する北側エリア**と谷中などの下**町が展開する南側エリア**では随分と装いが異なる。それは、北側エリアが**海食崖**によって形成された急勾配な土地なのに対して、南側エリアは現在暗渠となっている**藍染川などの河川**の侵食によって形成された土地であるという、地形的な相違点によって生じるものである。また、南側エリアには台地上と低地を繋ぐ坂が何本も存在し、土地造成をおこなうことで商店や住宅、寺院などの利用されている。

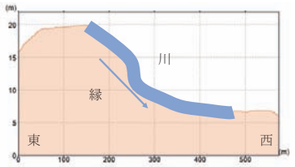

図６　北川エリア断面図（谷中）

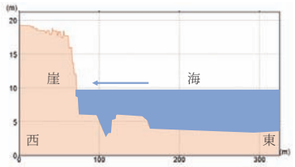

図７　南側エリア断面図（谷中）

b. 江戸初期の開発行為

江戸城（皇居）から見ると上野台地は北東方向の位置にあたり、江戸の鬼門と呼ばれている。江戸時代は現在と異なり、都市を外界から守る手段を重要視しており、中枢となる機関を中心として同心円状にまちを拡大してきた。その際に、都市に至る街道の終着地に寛永寺が配され大きな**寺町**を展開して、他の侵略から遠ざけたのである。台地上の広大な土地を占めていた寛永寺は外界から都市を守る役割に加え、そこに参拝客が数多く訪れることも特徴である。

D. 本郷台地

a. 台地の自然条件

本郷台地は縄文海進によって削り出された土地である。また、台地上には海抜約 20 メートル強ある地域が広がっている。そして、地中に潜っている伏流水が台地の淵にくると湧き水となり地表に現れる。この湧き水は**小川となり再度台地を侵食し緩やかな凹凸を生む**。同時に斜面地から湧き出てくる水はこの土地に豊かな植生をもたらす。

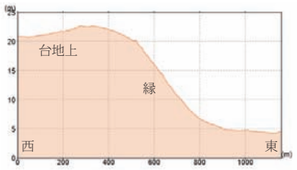

図８　東西断面図（湯島）

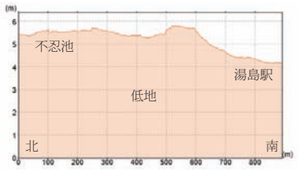

図９　南北エリア断面図（湯島）

b. 江戸初期の開発行為

本郷台地は、斜面地の断層に露出が起こったり、地上面が地下水に近づいたりして、多くの水源を確保できる地域である。水の調達が容易であるこの一帯は、**大名屋敷・武家屋敷・神社などの庭園をもつ建築様式に適した土地**であった。このように、本郷台地は江戸初期から水資源としての大きな役割を担っており、徳川家にお茶をいれるために用いられた水がこの地域から汲まれたことにより命名された御茶ノ水の地名が現在でも残る。

第３章　江戸期以降の上野台地史と本郷台地史

本章では、上野台地と本郷台地を通史的に述べ、資料を基に年表を作成した。特に、**江戸東京の時代変遷に伴う土地利用の変化について述べることで、より「縁」のもつ特性が明瞭化された。**

そして、土地利用の特徴として、谷中では江戸時代から多くある**寺院**が残っているのに対して、湯島では**屋敷**自体は残存せず屋敷の敷地の規模感だけが維持されている。

A. 上野台地史

1625 年（江戸時代）、上野台地の突端に**寛永寺**が創建される。寛永寺は、江戸における鬼門封じとしての役割があり、大変重要な都市的役割を有していた。大規模寺院には多くの参拝客が訪れ、**人々が集う場所**として台地上が賑わった。そのような、大規模寺院の周辺はその恩恵を受けて活気ある街並みが形成されていく。一方で、江戸に大きな被害をもたらした 1657 年の**明暦の大火**の影響を大きく受け、**上野広小路**ができる。1700 年代中頃には、不忍池の築地に茶屋・揚弓屋・講釈場などが軒を連ね繁盛していく。しかし、江戸時代終盤には、茶屋などがまちの風紀を乱すとして撤廃される。そのころ、衰退する政府からの援助不足も相まって、寛永寺も徐々に台地上の**広大な土地は縮小**していく。また、**戊辰戦争**（上野戦争）の影響により寛永寺が焼失してしまう。同時に上野や下谷も焼失するなど甚大な被害を受けている。谷中では中心である上野に比べ後発的且つ帰属意識をもち開発が行われ、寛永寺のお膝元的役割を担った。明暦の大火の被害を受けなかったこの地域は、**他地域から多くの寺院が移ってきて、寺町としての様相を確立**する 。さらに、谷中の特徴として**感応寺**の存在は大きく、境内にある**五重塔**が焼失しながらも再建し、まちのシンボル的存在になる。感応寺では、**富突き**、現在でいうところの宝くじのようなものが行われたことも相まって、商業地としても賑わった。感応寺は江戸時代の終盤に、感応寺から**天王寺**に改名している。谷中も上野戦争の影響を受け、多くの寺院が焼失している。

明治時代に入ると、上野は再び賑わいを見せる。それは、明治初期に寛永寺の境内の一部が政府により**公園**に指定されたことや、同時期に**東京芸術学校**や**東京音楽学校**といった教育機関が成立したことによる。明治時代に近代化が起こり始め、上野では**旧上野駅**が竣工した。谷中は、寺域であった一部が**谷中墓地**に代わり、多くの墓地が展開する。

大正時代、**博覧会のメッカ**である上野では東京大正博覧会が行われる。その後、**東京博物館**（国立科学館）ができるなど、より芸術の森としての要素が強まる。1923 年には関東大震災が起こり、上野は再び被害を受ける。

昭和時代は、1946 年の**東京大空襲**により、旧上野駅が全焼するという大きな被害を受ける。しかし、再建が図られ**新たな上野駅**が完成する。このころに、上野駅周辺で**闇市**が横行していた地域が改良されて、**アメ横**となり商いの文化が正式に形成される。また、1957 年には町のシンボルであった天王寺の五重塔で**放火心中事件**が起き焼失している。一方、江戸時代に起こり始めた、谷中の商いの文化は継承され続け、1981 年には東京都の「**モデル商店街第一号**」に指定される。

B. 本郷台地史

江戸時代、本郷台地は、上野台地のように中心となる寛永寺的寺社が存在したというより、点在する**武家屋敷・大名屋敷や寺院**が点在する形でまちができていく。周辺地域に町家や商家ができだしたのは、時代がさらに下ってからであり江戸時代中期以降のことである。また、**神田祭**が江戸の三大祭りとして賑わいを見せていた側面もある。
湯島では、谷中の感応寺のように**江戸の三大富突き**が行われ、人々が賭け事をしに足を運んだ。さらに、特質すべき点として江戸期より本郷、特に湯島では**麹・味噌の生産地**であった。これは、湯島に**水場があり、且つ高温多湿**な麹室をつくることのできる土地であることに起因する。

明治時代に入ると、江戸時代とは対照的に**人口が激減**する 。すると、江戸時代に多くあった武家屋敷等が解体され、その空洞化した土地をどのようにして利用するかが課題になる。そして、明治 17 年に発令された**華族令**などによって、武家屋敷であった土地は華族が住まう場となり 、土地利用の主体は変化しながらも住まうという機能が担保された。また、武家屋敷であった土地のうちいくつかに**東京大学などの教育機関**ができはじめ、徐々に**下宿業や宿屋業**が盛んになる。さらに、本郷一帯は、森鴎外、夏目漱石、樋口一葉、石川啄木などといった多くの**文人たちの住まい**として好まれた。また、明治期には**東京砲兵工廠**という日本陸軍の軍需品製造を行う工場ができた。湯島にある学問の神様といわれる菅原道真を祀る**湯島天神**の周辺に、多くの教育機関（**東京師範学校・東京女子師範学校**等）が集まると同時に、**下宿業や旅館業**で栄える。江戸期から展開していた地場産業が拡大し、明治末には、江戸の**味噌製造業者の約 40%、麹製造業者の約 80%**が旧本郷地区に集中していた。

大正時代になると、**印刷業や製本業、医療機器製造業**などの地場産業が根付きだす。昭和時代に入ると、**後楽園スタヂアムや六義園**の開園など、近代的な憩いの場として市民にも開かれた地域がみられるようになる。一方、戦後この市域の麹・味噌製造業は衰退し、ほとんどその様相を見ることはできなくなっている。

現在では、後楽園スタヂアムは後楽園球場や東京ドームシティなどの敷地に代わり**遊興地化**が進んでいる。明治期に多くできた、**大学機関や医療機関**の多くが残り、まちの景観をつくっている。湯島周辺に**ホテル**が点在しているのは、近代的な土地の価値に対する考え方に適した土地であると同時に、前近代から継承される土地の大きさが中規模であり適していることも要因である。上野の低地は商いの中心地として活気があるが、湯島周辺の低地に向かうに従い徐々にその活気は収まり、**中規模雑居ビルや小さな商店**が多くみられる。

第４章　縁

本章までで確認してきた谷中・湯島の「縁」において**共通する特徴**として、「**中規模性・後発的な整備・二面性の保有**」の３つが挙げられる。これらの特性は新たな江戸東京に通底する指標であり、台地上と低地を繋ぐ「**縁**」**の系統化**を行うことができた。

A. 中規模性

a. 周辺環境からの影響・土地造成

「縁」は谷中では**寛永寺**、湯島では**武家屋敷**という周辺にある機能の影響を受けて、土地の利用のされ方が決定される様相が確認できる。また、建物を建てる際に特異な例を除き、基本的には平らな敷地を整備しなくてはならず、「縁」は傾斜地であるため大規模な整備が困難であり、**中・小規模に抑えられる**。

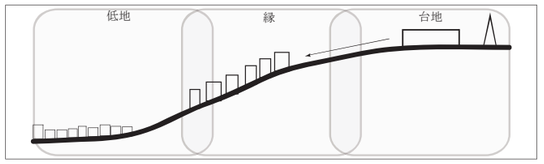

図１０　周辺環境からの影響

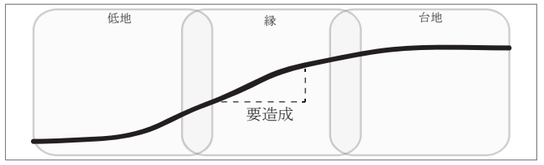

図１１　土地造成

B. 後発的な整備

坂・道草空間

「縁」には、先行して計画された台地上と低地を繋ぐ役割としての**坂**が整備される。また、その坂を利用する人々に対しての商いの場が発生し**道草空間**となる。江戸時代、谷中の感応寺と湯島の湯島天満宮で富突が行われ、坂にある商店が繁盛したのもその１つの例である。

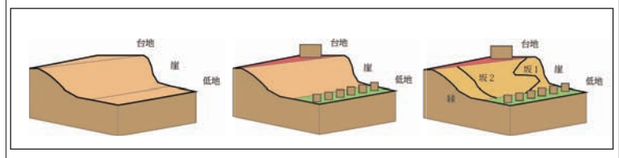

図１２　坂と道草空間の形成

C. 二面性の保有

商店街と住宅街・坂と側道

「縁」には、台地上へと向かう**公共性のある坂の周辺に商店街**が点在する。同時に、坂から伸びる側道が、**私的公共性をもち住宅街**が展開する。このように、商店街と住宅街・坂と側道といった２つの要素が共存する様相が確認できる。

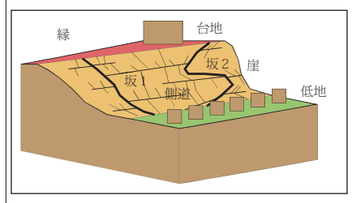

図１３　坂と側道の形成

図１４　台東区の細道分布

第５章　考察

A.「縁」の「型」

本章では、江戸初期の開発行為に基づいた「縁」の地域性の特徴を「型」と定義し考察を行う。

a. 寺町型―谷中

谷中では、江戸時代に展開した多くの寺院が震災や戦災を経験しながらも現代にまで継承されている。しかし、その寺町の様相の上に、商店街や住宅街、路地空間など様々な現代に合わせたレイヤーが重なっている。つまり、**純粋な寺町ではなく「寺町型」**として現代ではその装いが維持されている地域と言える。

b. 屋敷型―湯島

湯島は、江戸期に多くの武家屋敷や大名屋敷といった時代に帰属した居住環境があったために、時代の変遷とともに社会に適合した土地利用が変化していく。しかし、その際に江戸時代初期に整備された土地面積が「縁」の特性により担保されたために、現代では大学機関や医療機関、雑居ビルや集合住宅等へと変化し、「**屋敷型」の様相**を呈している。

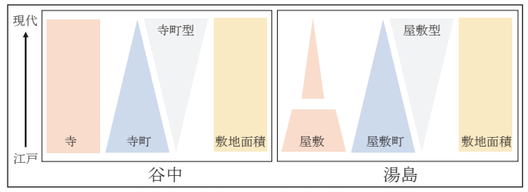

図１５　寺町型―谷中と屋敷型―湯島の変遷

B.「縁」の可能性

ここでは、「縁」とは異なった条件の場所に目を向けてみる。1958 年昭和を代表する**電波塔東京タワー**は赤坂・麻布台地上にたった。その土地は元来、江戸時代に裏鬼門として配された増上寺の土地であった。一方、2012 年に竣工した**東京スカイツリー**は押上という江戸時代位初期泥地であった低地に建てた。これは、平成時代の技術革新によるものであり、地勢条件よりも商業的要因により開発が行われた例である。このように台地上のみならず低地にも**大規模開発行為**は起こり、土地利用の変化は時代に合わせてドラスティックに変化していく。

だが、「縁」では、第４章であげたように中規模性を持つため、大規模開発行為が行いにくい地域であるために、**場所の固有性が維持されやすい**。そして、後発的な整備が行われるために、**周辺環境に適した土地利用**が行われる。さらに、台地上と低地の両方に面するという、二面性を保有する特徴があり、**商業的価値も高い**。これらの理由により、「縁」を体系的に分析すると今後固有性のある土地利用の形式がある地域として価値ある場と言える。

図版出典

○図 1,2,3,5,10,11,12,13,15　筆者作成
○図 4,6,7,8,9 「国土地理院 地理院地図」より筆者加筆
○図 14　台東区ホームページ「区内全域参考図」https://www.city.taito.lg.jp/
（最終閲覧日：2019.11.01）

参考文献

○陣内 秀信『東京の空間人類学』(筑摩書房 1992)
○陣内秀信・高村雅彦編の『水都学Ⅲ』（2015 法政大学出版局）
○伊藤毅『東京大学が文京区になかったら』(2018 NTT 出版)
○『図集 日本都市史』（財団法人 東京大学出版会）
○「台東区ホームページ 区内全域参考図」
（https://www2.wagmap.jp/taito/Portal）閲覧日：2019/09/23
○高野 泰幹「都市の崖ー豊島郡湯島郷の連続を通してー」(2015 年度早稲田大学建築史研究室卒　　業論文)
○師橋辰夫『嘉永・慶応　江戸切絵図』（人文社 1995）
○大石学『坂の町・江戸東京を歩く』（PHP 研究所 2007）
○横関英一『江戸の坂 東京の坂』（中公文庫 1981）
○横関英一『続 江戸の坂 東京の坂』（中公文庫 1982）
○芳賀ひらく『デジタル鳥瞰 江戸の崖 東京の崖』（講談社 2012）
○林順信『東京路上細見①―湯島・本郷・根津・千駄木・神田』（平凡社 1987）
○酒井不二雄『東京路上細見③―上野・御徒町・谷中・入谷・根岸』（平凡社 1988）
○森まゆみ『谷中スケッチブック』（エルコ 1985）
○江波戸昭『東京の地域研究』（大明堂 1987）
○岡本哲志『江戸→TOKYO のなりたち教科書』（淡交社 2017）
○尾島俊雄『この都市のまほろば vol.6』（中央公論新社 2012）
○師橋辰夫『嘉永・慶応 江戸切絵図』（人文社 1995）